

## 多数民族・少数民族 2 分研究のゆくえ：中国研究の場合

末成道男

(東洋文庫研究員)

### 1. 2分研究の「功と罪」

研究の方法は、実態に合わせて選び編み出すもので、ア priori に与えられるものではない。その意味からすると、過去の中国研究において、当然のごとく漢族と少数民族に分かれて研究がおこなわれてきたことは全く無意味だったわけではない。中華文明が文化の根幹を成す社会と、それと関係をもっているも独自の固有文化をもつ少数民族社会では文化・社会の構成要素や構造が著しく異なり、同一のレベルで論じることは無駄が多い。つまり、区分自体は実際的な理由がありそれぞれの理解の研究の進展をもたらしたことは否定できない。

しかし、こうした「功」の部分を認めた上で、常識的区分によって見逃された罪の部分を考察することも、意味のあることであろう。このような研究史の上でのマイナスを取り上げることは、過去の研究をあげつらうことを意図するのではなく、自省をこめて、これからの研究の方向付けの一助としたいからである。

「罪」の部分としては、以下のような点が指摘できよう。

#### 1) 漢族文化自体(その形成期から現在にいたるまで)の複合性を見逃すのを助けた。

衣食住を見ても分かるように、中華文明は、異質なものを吸収、総合し、ひとつの体系としたものが多い。こうして体系が形成されると、こんどはそれが標準となって域内の差異を消し均質化してゆくところに中華文明の同化力が認められるとあって良いだろう。漢文化を自明のものとする視点からは、このような特色への関心は生まれない。

#### 2) 中華文明自体のメカニズムについて具体的な解明に向かうのを妨げた。

たとえば、漢字の持つ普遍化への強力なメカニズムはどのようにして働いたのか。それは、漢字をとおして古典文化の共有をもたらし、それに基づく文書行政により、異言語集団をも取り込み可能にした点は、漢字の存在を自明視した漢族文化古典研究からは見えにくく、周辺の諸文化や文明と比較することにより明確になるのではなからうか。

#### 3) 「漢族」と「少数民族」の境界にある現象の実証的な研究をないがしろにさせた。

境界は、「漢化」のひとつの過程としてとらえられ、理解される傾向があり、その相互性あるいは境界事例の独自性については余り注目されなかった。例えば、台湾の平埔族は一部の例外を除いて漢族研究者からも、原住民研究者からも重視されなかった。筆者の経験では、1977年の社頭調査、1985年の五湖調査においても周辺居住の平埔族とのかかわりについてインフォーマントの経験談を聞くことができた。(Ex.五湖の平埔の族譜編集) これ

からすると、注意すれば 1980 年代までは、平地においても、かなりの聞き取り資料が収集可能であったが、それが問題として取り上げられることが無かった。

4) 漢族の少数民族化も研究対象とはならなかった。

台湾アミ族調査の際、強力な背景をもたない漢族が婿入りしアミ族の習俗に同化している例があった。また、サイシャットでは、幼児買取などのかたちで収養された漢族がサイシャットの文化的脈絡で取り込まれ、なかには指導者として活躍した例もある。

また、この現象は、華人の現地化というかたちで華僑、華人研究と連続性をもっている。例えば、ベトナムにおける華僑、華人、明郷といった漢族の土着化への過程の解明は、上記のような個別的な場合とは違った形で、「逆漢化」の研究対象として 2 分研究の突破口となろう。

5) モンゴル族、満族など漢族と歴史上政治的に深いかかわりをもった少数民族の漢化の過程や、「漢族化」しそこねた周辺諸国 韓国、日本、ベトナムにおける漢化の過程の比較研究に関心が向かわなかった。

以上、いくつか気付いた点をあげたが、総じて言えば、漢族の伝統文化を完結したものとして扱い、漢族、非漢族相互の交流や変化など動的な研究を遠ざけた点に問題があったといえるだろう。方法の上では、トピックによっては、例えば、儒教に関する問題のように文献中心の研究成果に強く引き寄せられ、人類学の特徴である草の根レベルの検討が不十分であるか行われなかった。

## 2. 新たな状況のもとでの 2 分研究

ところで、現在、こうした区分を崩す現象として、都市化や国内外の移住の増加、グローバル化による文化の均質化の影響があげられよう。しかし、これらはかならずしも、固有の文化全てを地ならし、一様に世界共通の文化形成に向かうのではなく、一方ではその強い影響を受けながら、他方では独自の対応をしている現象も見出すことが出来る。

例えば、台湾原住民は、すでにその 1/3 近くが台北など大都市に居住しており、一部は教員や公務員として中流の生活を送っているが、多くは工場や建設現場で肉体労働者などの下層市民として生活している。かれらは、普段はまわりの漢族とじかに接触し、学校で習った北京語だけでなく、聞き覚えた台湾語も用いて生活している。しかし、故郷とのつながりを保っている者も多く、また、同じ族群が集住することは稀であるが、公営住宅の原住民枠などにより族を超えた原住民がある程度近接居住し、豊年祭を組織したりしている。原住民信徒を中心にした教会も、原住民の拠点となっているが、信徒集団としての意識は乏しく、むしろネットワークの中心として機能している。このように、漢族の大海のなかでの都市生活者たちは、第二世代から母語を失いかけていて百年前の平埔族と同様の状態にあるが、固有な文化の重要性は、かれら自身によっても、行政の側でも認識されて

いる点が異なっており、ただちに一線的な衰亡の道を辿ることはないであろう。<sup>1</sup>

こうした変化を把握するには、かつての定点観察を基にした集中調査法だけではなく新たな調査法を加える必要がある。都市的環境においては、たとえミクロな範囲を設定しても全体的把握が難しく、またプライバシーの観念も強くなるなど様々な困難が生じる。そのため近代社会研究の先達の方法も参照すべきであろう。しかし、これは例えば統計好きな量的把握をこととする社会学の軍門に降ることを意味するのではなく、人類学独自の方法見方を活かした調査研究の可能性を追求する必要がある。問題の設定によっては、ミクロな範囲での集中調査と人々の行動と結びついた現場の意識を重視した草の根人類学の手法を応用する余地は残されている。<sup>2</sup>

このような環境においては、従来の固定的な漢族、非漢族 2 分法は役割を終えたと言ってもよいであろう。漢族と非漢族の画然とした住み分けはなくなり、漢族的要素は、多数のうちの一つとして相対化されよう。ただし、それは人類学の相対主義論におけるような構成要素同等の位置づけに甘んじるとも思えないし、それ自体が現代的環境に応じて変化している。したがって、漢族的要素と非漢族的要素の関係、漢族的要素自体の変質過程を実証的に捉える研究が望まれる。

### 3. 近未来的状況のもとでの 2 分研究

様々な問題を抱えながらも存在感を強めている中国の存在感増大のなかで、漢族的要素は、どのような形を取るだろうか。

台湾の事例をみると、現在の台湾の置かれている特殊な状況とはいえ、非漢族的な要素（原住民文化）がかつてない注目を集め、その再評価と優遇政策は原住民側に大きな自信を与えている。しかし、この事が漢族的要素にどれだけのインパクトを与えたかということと漢族中心的な思考にやや相対的反省の機会を与えた程度にとどまる。母語教育も、学校教育のカリキュラムに組み込むなど組織的に試みられているが、現実には国語(北京語)、そして台湾での多数集団である福建語の影響力はますます強まりつつある。つまり、原住民優遇策が最も取られている現在でさえ、漢族主導の一体化が進行している。漢文化のほうも、王朝中華的要素は儀礼面や人間関係では残るものの、次第に国民党時代の人治から法治へと移行しつつあると推測される。技術の近代化が、人間関係の一部を変えた例としては、繁忙期の汽車の切符販売が IT システムに切り替えられたことによって、コネによる優先購入が姿を消したことが挙げられよう。

しかし、人間関係全体がこうしたマクロな政治経済面の変化に連動して直ちに变化するわけではない。また、経済面において、中国は、アメリカ版グローバリゼーションと妥協

<sup>1</sup> 末成道男 2005「序文」『講座世界の先住民民族 フェースト・ピープルズの現在 1—東アジア』

<sup>2</sup> これは、けした全く新しい方法を案出してゼロから始めるというのではなく、むしろ従来の草の根人類学の方法を忠実に実施する段階で、直面する困難を解決する試みの中から新たな視野が開けるといった性質のものであろう。その意味で、最近の学位論文の中には現代的状況から目をそらすことなく取り組んだ研究が認められる。

しながら、抵抗するだけの規模と力を備えているように見える。そして、これらの動きはかつての王朝中華文明と同様(勿論、その性質、環境の差異により、違ったかたちではあるが)周辺社会に影響を与えずにはおかないであろう。このような場では、もはや漢族文化対非漢族文化よりも、現代中国文化対周辺文化といった構図のほうが、現実を表現するのに適している。<sup>3</sup>アメリカ版グローバリゼーションと共に、中国が独自の価値の発信地となるとしたら、それはどのような普遍性をもったものになるのだろうか。ねがわくば、観察してみたいとおもう。

(2006.7.7 フェにて)

---

<sup>3</sup> 現在のベトナムは、まさにアメリカ版グローバリゼーションの影響をもろに受けつつ、現代中国にも接している。ITの普及や著作権法の実施などすでに多くの面でグローバリゼーションの影響が及んでいるが、今年度末に予定されているWTOへの加盟が、ベトナムの政治経済に大きな影響をもたらす可能性については、識者の中で論じられている。中国文化の影響で象徴的なのは、TVドラマ番組の多くが、中国製であり、それもかつての伝統的な史実ものや香港のアクションものから、ホームドラマを中心に現代生活を描いたものが増加しつつあることである。さらに、最近経験した事件を通して、ベトナムの建前的論理と中国的な実質的な論理の相克があり市場経済化の進行とともに後者が優勢になりつつあるという印象を得た。つまり、これは、市場経済化が必ずしも上記のグローバリゼーションを浸透させることには結びつかない事例と言えよう。